

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

「『プレゼンス・アフリケーヌ』研究 新たな政治=文化学のために」
(平成 28 年度第 2 回研究会)

日時：2017 年 3 月 25 日（土）10:00～19:00、3 月 26 日（日）10:00～16:00

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 マルチメディア会議室（304 室）

参加者：3 月 25 日 13 名(内外国人 1 名)、3 月 26 日 14 名（内外国人 1 名）

日時：2017 年 3 月 25 日（土）10:00-19:30, 2017 年 3 月 26 日（日）10:00-16:00

場所：AA 研マルチメディア会議室(304)

使用言語：日本語・フランス語（通訳付き）

3 月 25 日

・佐久間寛（AA 研所員）

「国際シンポジウムに関する報告」

・A.C. ロモ・ミヤジオム（AA 研外国人研究員，ストラスブール大学）

“Présence Africaine dans le contexte de la décolonisation de l’Afrique”

コメンテーター：福島亮（東京大学大学院生）

・砂野幸稔（AA 研共同研究員，熊本県立大学）

「1950 年代『プレゼンス・アフリケーヌ』と言語の政治」

コメンテーター：元木淳子（法政大学）

・全員：討論と打ち合わせ

（3 月 26 日）

・佐々木祐（AA 研共同研究員，神戸大学）

「忘れられた黒人社会学者」とプレゼンス・アフリケーヌ」

コメンテーター：崎山政毅（立命館大学）

・全員：総合討論

・全員：国際シンポジウムについての打ち合わせ

概要

2016 年度第 2 回（通算第 5 回）研究会を上記の日時に開催した。以下概要を報告する（敬称略）。

〈3 月 25 日〉

はじめに佐久間寛が、本年 8 月 AA 研にて開催予定の国際シンポジウム「『プレゼンス・

『アフリケーヌ』研究——超域的黒人文化運動の歴史、記憶、現在」の準備状況について報告をおこなった。とりわけ、予想を上回る 18 カ国 61 名から申込があった点をふまえ、当初の予定より大規模なシンポジウムとすることが提案された。これに対して大規模な国際シンポジウムを開催するうえで必要不可欠な予算や人員の問題が十分に検討されていない点が指摘されると共に、参加者は 20 名に絞り込むべきことなどが議論された。

つぎに第 1 の研究報告として、アジェ・セレストアン・ロモ・ミヤジオム (AA 研外国人研究員、ストラスブール大学) より“*Présence Africaine dans le contexte de la décolonisation de l’Afrique*”というタイトルの発表が行われた (フランス語通訳中村隆之)。『プレザンス・アフリケーヌ』誌公刊の意義をアフリカの植民地化が本格化する 19 世紀末の脈絡に遡って検討し、同誌がアフリカの脱植民地化運動におよぼした影響を、「個人を社会化するメディアとしての力」という観点から分析した。この発表を受けて、フランス語圏カリブ文学を専門とするコメンテータの福島亮 (東京大学大学院) は、『プレザンス・アフリケーヌ』誌がもつ「根源的力」を明らかにした本発表が「支配と抵抗をめぐるあらゆる問題」に開かれたものであることを評価しつつ、(1) 『プレザンス・アフリケーヌ』と『プレザンス・アフリケーヌ』以前の定期刊行物に共通するものと両者を分断するものは何かという点と、(2) 「プレザンス・アフリケーヌ」の中心テーマである「諸民族の自己決定権の原則に基づく自治」というテーマを、冷戦崩壊後を生きる私たちはどのように受け止めるべきなのかという点をめぐり問題提起を行った。発表者からは、(1) をめぐっては『プレザンス・アフリケーヌ』が同誌に先行する定期刊行物によって育まれた問題関心を「結晶化」するかたちで成立したことが、(2) をめぐっては「自治」に潜む両義性が現在さまざまな形で先鋭化していることなどが回答として示された。

第 2 の研究報告として、砂野幸稔 (AA 研共同研究員、熊本県立大学) は、「1950 年代『プレザンス・アフリケーヌ』と言語の政治」というタイトルでの発表を行った。西欧近代をめぐるネイション (国民) と言語 (国語) の不可分の関係が脱植民地期の『プレザンス・アフリケーヌ』のテキスト群においていかなる重要性をもっていたか/いなかったという点を、Ch.A. ジョップ、L=S.サンゴール、F.ファノンのテキスト等によりながら綿密に論じ、パリでフランス語により出版された雑誌である『プレザンス・アフリケーヌ』が、ネイションの立ち上げという政治プログラムをめぐり抱え込まざるを得なかった限界を指摘した。これを受けて、現代アフリカ文学を専門とするコメンテータの元木淳子 (法政大学) は、そうした限界を有する『プレザンス・アフリケーヌ』や同誌で活躍した黒人知識人、とりわけシェク・アンタ・ジョップの議論がそれでも今日高い評価を受けつづけている理由は何かという点を問うた。また他の参加者からは、『プレザンス・アフリケーヌ』がフランスにおけるアフリカのプレザンスを扱っているのであってアフリカにおけるネイションの表現とはなりえていないという発表者の主張が妥当か否かという点について疑問も提出された。これらの問題をめぐり発表者と参加者からは反論を含む多様な見解が提出され、予定の終了時刻を 30 分以上すぎるまで白熱した議論が続いた。

〈3月26日〉

第3の研究報告として、佐々木祐（AA研共同研究員，神戸大学）が「「忘れられた黒人社会学者」とプレゼンス・アフリケーヌ」というタイトルでの発表を行った（当初は『プレゼンス・アフリケーヌ』誌における「詩学」と「社会科学」というタイトルでの発表を予定していたが変更となった）。1999年に『プレゼンス・アフリケーヌ』誌に掲載されたグレゴリー A. トーマスの論文" Re-reading Frantz Fanon and E. Franklin Frazier on the Erotic Politics on Racist Assimilation by Class "を精読し、過去の保守的社会学者として切り捨てられがちな E.F.フレイジアと、革命的思想家として知られる F.ファノンの思考が、階級とセクシャリティという問題をめぐって共鳴しているという同論の主張を紹介した。これを受けて、ラテンアメリカ近現代史・文化研究を専門とするコメンテータの崎山政毅（立命館大学）は、トーマス論文に欠如している、フレイジアとファノンを取り巻く同時代の思想状況（アメリカにおけるマルキシズムとマッカーシズムの動向、フランスにおけるフロイト学派やラカンらの動向）をフォローしたうえで、トーマス論文に一程の評価を加えつつも、分析概念の曖昧さに起因する議論の混乱がみとめられることを指摘した。その後、他の参加者も加わり、トーマス論文が学史的にいかなる位置どりをもつのかという点や、こうした論文が1990年代の『プレゼンス・アフリケーヌ』誌に掲載された事実をどのように捉えるべきかといった点をめぐり議論が交された。

午後からは、前日の議論をふまえて再度国際シンポジウムに関する打ち合わせが行われた。シンポジウムの開催日数、一人あたりの発表時間やプログラムの決め方、当日のアテンドや通訳の問題など、多岐にわたって意見が交され、予定を1時間以上越えての閉会となった。

（文責：佐久間）